



0歳からの教育

楽で楽しい子育てのために

第八話

「伸びる子に育てる」子育て ③

受験準備は「伸びる子に育てる」ことに繋がるのか

長年幼児教室を運営して思うこと

真面目な教育者ほど幼稚園・小学校受験に否定的な見解を持つことが多いようです。モンテッソーリ教育に携わっている人達も「モンテッソーリ教育を受験に利用」していると、不快に思われているかもしれなせん。また、多くの保護者の方も内心気に掛っていることでしょう。

しかし、長年幼児教室を運営し、教師の指導、家族のあり方、子どもの成長などを、長い期間観察できる立場にあると、自ずから気がつくことがあります。知らず識らず、記憶の中で追跡調査をしていることがあります。この春に思うところがありましたので、少し話をしたいと思います。

ある先生の事例

小学校受験担当のO先生の話をしてしましよう。O先生が年中から指導した生徒が2002年の小学校受験で素晴らしい合格実績を上げました。少ない受け持ちの生徒の中から、慶應幼稚舎を含め、第一目標の難関校に多くの生徒が合格しました。その生徒達が今年大学に進学したのです。その生徒たちは私も一人一人覚えています。

私はその子たちのその後に、ある傾向性があるのに気がつきました。子どもたちは小中高と部活などに熱中するなど、それぞれ充実した学校生活を過ごし、高校では将来自分のやりたいことを見つけ、ただ一流大学に合格したと言うのではなく、自分のやりたいことに合った大学、学部に進学したことです。

O先生の指導の特色は、子どもに、「課題に興味を持たせる」ことを大切にし、導入部分に工夫を凝らしていました。興味を持てば、子どもは指導に乗ってくるのです。子どもは集中し、自分の頭で色々考え始めるのです。集中には自己制御力が必要で、集中を繰り返すことによって自己制御力が発達します。また、自分で考えることは、問題解決能力を向

上させます。大きな筋肉を使ったり、手先の巧緻性を使ったりするプログラムは、子どもの思考の発達を促します。この時期の子どもにとって、「目的を持った随意筋の運動」と思考とは結びついているのです。

子どもに興味を持たせるためには、子どもの発達段階を理解し、多くの引き出しの中から子どもたちに合ったものを提供する力量が必要です。受験準備では、子どもの認知能力（IQで測れる様な能力）を向上させるにとどまらず、友達と関わったり、一緒に工夫したり、協調したり、ルールを守ったり、脳の「実行機能」を高めるためのトレーニングが組み込まれています。このようなクラスでは、子どもが生き生きしています。年中、年長を通して教師は、子どもに、乗り越えられるチャレンジを課し、子どもが成功体験を積み重ねて、より複雑な「努力を伴うコントロール」も出来る様にするのです。

そんなO先生の年中のクラスで或る日事件が起きました。ある保護者が「ある幼児教室では子どもを厳しく躾けてくれるそうです、先生もそのようにして下さい。」と要望したのです。お行儀悪く座っている子どもの足を授業中に強く叩くらしいのです。確かに、年中の男子はまだ人になり切れていなくて、元気な男の子のお母様の気持ちはわかります。事実、その幼児教室に受け持ちの生徒が何人かが体験に行かれたようです。O先生は保護者の方にこう申し上げました。「年中の時期に、学習とお行儀の両方同時に行うのは難しいことがあります。叩くようなことをしたらその子はショックでその後の指導が上の空になるでしょう。子どもを指導に集中させ、積極的に関わらせることによって、年長の受験までに自分をコントロールする力を育てます。」もちろん、指導中に教師は注意をいたします。ただし、心の傷を作っては、子どもは改善しないのです。一般論でも、心に傷を残す叱り方は幼いときに良い方向に向かいませぬ。

意図的に行動を抑制して衝動をコントロールし、計画的に行動するという「努力を伴うコントロール」、「認識の柔軟性」、「ワーキングメモリー（作業に関連することを短期間記憶し、問題解決する）」の能力は合わせて「実行機能」と呼ばれ、子どもが興味を持って何かに主体的にかかわることなどによって実行機能の能力は育まれるのです。

これらの能力の向上はご家庭でもできます。気が散らず課題に取り組めることで、子どもは、一人でも自分の行動や感情をコントロールできるようになります。ご両親はお子様はその段階で興味を持って、集中できることを探してあげることです。また、乳児期から充分愛された子は、「大好きなお母さんやお父さんに褒めてもらいたい」ので、頑張る努力をします。

小学校が欲しがらる子ども

私立の小学校の校長先生に「どの様な子どもが欲しいのですか」と聞いて回ったことがあります。多くの校長先生が「将来に伸びる子どもです」と答えたのです。「ではどの様な子どもが将来伸びる子どもなのですか」と聞きますと、「好奇心のある子どもですね」とお答えになる校長先生が多かったのを記憶しています。中学受験をさせる学校の場合、中学

受験の成果と小学校受験の入試成績（知能テストで計れる様な認知能力）とは余り相関がないとの話です。それでも色々な角度から、子どもの可能性を探って選抜するのです。家庭でも、どの様に子どもの好奇心を育むかということを念頭に入れるべきです。子どもをよく観察し、**子どもの好奇心に寄り添ってあげる**ことが大切です。男の子ならば、お父さんの出番です。ある年少のお父さんは、子どもが乗り物に興味があるのに気が付き、あるお休みの日に、二人で電車に乗り、出かけました。一緒に切符を買って、電車の名前を覚えたり、駅の名前を覚えたり、乗り換えてみたり、東京駅で新幹線も見ました。家に帰ってから、二人で工作をして、ボール紙で電車を作りました。電車を作るときもなるべく子どもの考えを誘う様にしました。別のあるお父さんは、一緒に何かをやるときに「さあ、計画から練ろう」と必ず言って、一緒に考えます。慶応幼稚舎の考査でグループごとの課題に取り組むとき、そのお子様は思わずこの言葉を発し、そのお蔭か、皆で課題が上手くまとまりました。彼は合格です。お父様のちょっとした工夫が、子どもの成長を応援するのです。

男女の発達の違い

元気の良い男の子を持つお母様が心に留めなくてはならないことが一つあります。それは、女の子と男の子の発達のプロセスが違うことです。

一般に女の子のほうが早熟で、言語能力も発達しているといわれています。上に女の子、下に男の子の家庭の場合はとくに男の子が幼く感じる様です。ギャップを感じ、つつい過度に厳しくなってしまうことがあります。先日年少、年中児対象の実験ビデオを見ました。母と子が一緒に大工ごっこをして遊んでいて、お母様が間違えて指をかなづちで打ってしまい（振りをする）、痛がるのです。女の子は一樣にお母さんのことを心配し、撫でてあげたり、慰めてあげたり、中には泣いてしまう子もいました。ところが男の子は、お母さんが「痛い」といつても、皆知らん顔です。共感能力にも発達の差はあるのです。これは男女の発達プロセスの違いで、逆に、自転車などを描かせると男の子は車輪とかフレームなどを描き、構造的に捉えていることがわかりますが、女の子はうまく描けません。

男女の言語脳力などの差は小学校に入ってもしばらく続らしく、ある私立小学校卒業の女性は、小学生の時は男子を劣った生き物のようになっていたそうです。男女には発達の差があり、特に、年少や年中のときにはそのことも心に留めておくほうが、お互いの精神衛生のため良いかも知れません。

「ペリー・プレスクール・プロジェクト」の実験

ここで、アメリカの児童心理学者と教育学者が1960年代に行った実験について紹介します。この実験では長い年月の追跡調査が行われた、意外な事実が判明しました。

貧困地区の低所得かつ比較的IQの低い親を持つ三歳から四歳の子どものを、質の高い二年間の就学前プログラムに通わせ、通わせなかった対照群と比較調査を行いました。通わせ

たこどもたちは追跡調査の結果、このプログラム卒業後、小学校に入学して一年から二年まではテストの結果が良いが、三年生になると変わらなくなることが判明したのです、予想外の結果でした。当時の「知能至上主義」の下に行われた試みであったのですから。当時は早期の知能教育が貧困、社会格差を解消すると皆が思っていたのです。

その後、さらに卒業生を追跡調査したら、さらに驚きの事実が判明しました。ペリー・プレスクールに通わせたグループに知能指数に及ぼす効果は持続しないが、それ以外の何か重要なことが起こっていたのです。

ペリー・プレスクールに通った子どもたちのその後の特徴

- 高校を卒業している割合が高い
- 雇用されている割合が高い
- 四十歳の時点で二万五千ドル以上の年収を得ている割合が高く、生活保護を受けたことのある割合も低かった

対象者の小学校教員からのレポート等も慎重に分析してのペリー・プレスクールが生徒たちに与えた恩恵の三分の二は非認知的スキル、つまり、IQ等の認知的スキルではなく、好奇心、自制心、社会性等の非認知的スキルであったと確信したのです。

つまり、ICEの先生の指導が、受験準備を通しながら、非認知的スキルを育ててきたことと同様です。ICEの教師は、教育の本質をわきまえています。

子育て・教育で大切なことは、知識を与えるだけではなく、その子の脳を本来の意味で「使える脳」に育むことです。

受験準備を通して非認知的能力も育成する条件

- 担当教師が単なる受験教師であるだけでなく、子どもに発達段階があることを理解していること。発達段階に応じた、提供方法を知っていること。子育て・教育についてよく勉強していること。
- 担当教師は、子どもには教え込むのではなく、子どもの能力は「引き出す」ものであることを知っていること。
- 指導を通して、子どもたちが好奇心を引き出されたり、わかる喜びを実感したり、頑張ってきた成功体験を積み重ねることができること。
- 通っている教室が受験技術の指導だけでなく、保護者に子育てや教育に関する正しい情報と啓蒙を行ってくれるところであること。保護者は、子どもにとっての最大の環境です。保護者が受験準備に際し、生き方や、子育てを総点検すること。教室がそれを支えることができること。保護者が教師を通し、学ぶ機会と提供されていること。

今回はたまたま O 先生の事例を出しましたが、ICE にはあらゆるコースにその分野のエキスパートの教師が大勢おります。先日、日本で唯一のセラプレイの国際資格を保有する高井先生からこのようなことを言われました。「ICE の生徒さんたちは合わせですね。ICE には受験の先生だけでなく、モンテッソーリや色々の背景を持った先生たちがいて、お互いに学び合っている。子どもと向かい合うにはそれが大切ですね」。以前高井先生に ICE の先生向けの研修をしていただいたことがあり、ICE の教師をご存知なのです。

もし、受験準備を通して、親子ともに辛い思いをしたり、受験など二度としたくないと思うようでは、その教室選び、教師選びは失敗といえるでしょう。仮に合格しても、「伸びる子」に育てたとは言えないのです。受験準備は確かに大変な部分があります。しかし同時に子どもの中に、成功体験が積み重なり、自信に繋がったり、受験準備を通して家族が一体になれば、生涯に亘って得るものも大きいのです。

現在、海外の最新の教育学、脳科学の動向

前述のペリー・プレスクールの実験などから、「知能至上主義」から、前頭葉、さらにその前面の前頭連合野（前頭前野）の機能である、「実行能力」の育成に注目が集まっています。「実行能力」とは、IQ 等では測れない非認知的能力です。

「実行機能」については、先ほど述べましたが、その機能をつかさどる前頭連合野（前頭前野）の働きについてより詳しく紹介しましょう。以下『脳科学辞典』からの引用です。

「この脳部位（前頭前野）の脳に占める割合は、ネコで 3.5%…（中略）…チンパンジーで 17%であるのに対し、ヒトでは 29%を占める…（中略）。前頭前野は認知・実行機能と情動・動機づけ機能を合わせ持っている。前頭前野は外側部、内側部、眼窩部（目の下）に分けられる。外側部はワーキングメモリー、反応抑制、行動の切り替え、プランニング、推論などの認知・実行機能を担っている。眼窩部（目の下）は情動・動機づけ機能とそれに基づく意思決定過程に重要な役割を果たしている。前帯状皮質を含む内側部は社会的行動を支えるとともに、葛藤の解決や報酬に基づく選択など、多様な機能に関係している。

前頭前野は全体として『定型的反応様式では対応できないような状況において、認知的、動機づけの状況を把握し、それに対して適切な判断を行い、行動を適応的に組織化する』というような役割を果たしている。」

脳科学者によって表現が若干ことなることがありますが、各領域が連合し、関係し合っており、状況に合わせた最適の解決法を生み出すのが、前頭前野の役割です。より良く生きるためには、生まれたときから、いや、生まれる前から、「使える脳」に育くまなくてはならないのです。しかしそれは、一般に流行している早期能力開発とはむしろ方向性が逆な場合が多いのです。子どもに潜在的に備わっている「伸びよう」とする力を引き出す子育て、教育が前頭連合野（前頭前野）を育成する教育です。

同時に、乳幼児期に母（または変わる存在、祖母など）と子の基本的信頼関係（愛着）を形成して、人格の土台を形成することが大切です。このことは別の機会に述べます。

モンテッソーリ教育においても、赤ちゃんが生まれた瞬間から、「伸びよう」とする力を引き出す環境のセッティングと働きかけをします。赤ちゃんが自由に体を動かせる環境を用意することも、赤ちゃんが自分の身体を自分の意思で動かし、自分の能力を実感したり、周囲を能動的に探索して世界を広げることに配慮しているのです。このようにして育った子どもは前頭連合野の発達したヒトに成長するのです。

日本モンテッソーリ協会理事の相良敦子先生が「モンテッソーリ教育を受けた子どもの美質が前頭連合野の働きと合致している」ことに気が付き、「モンテッソーリ教育のどんな経験が良かったのか、その経験をしていたときに、子どもの脳の中で何が起こっていたのか、脳科学者にたずねたいと思った」と著書の中で述べられています。相良敦子先生について第七話で少しお話しして、本来は、今回そのことについてお話ししてみようと思いましたが、この春に大学に合格した ICE の卒業生について思うところがあり、そちらのことを今回書きました。

ICE では、自由ヶ丘に素晴らしい「モンテッソーリこどものいえ」を開設しました。私の期待を超えた理想の環境です。脳科学が目覚ましい進歩を遂げましたが、それでわかったことは、モンテッソーリ教育のすばらしさです。そのことについて次回で述べたいと思います。

ICE幼児教室のホームページはこちら